

ど きん もく すい か げ 土 金 木 水 火 月  
おかしな おかしな

肥田美代子 作 水 沢 研 絵





子どもの文学

おかしな<sup>げつ</sup> 月 か<sup>すい</sup> 水 もく<sup>きん</sup> 木 きん<sup>ど</sup> 金 土  
おかしな

NDC913 偕成社 150 p 23cm

発行 1984年11月 初版第1刷

作 者 ひ<sup>だ</sup> 肥 田 み<sup>よ</sup> 美 代 こ<sup>こ</sup> 子  
発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03)260-3221(営業部) 3229(編集部)

振替 東京 5-1352番

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-03-626820-1

Printed in Japan

© Miyoko HIDA, Ken MIZUSAWA 1984

どきんもくすい か げん  
 土金水 火月 土金水 火月  
 なかなかな かなかな

肥田美代子作 水沢 研絵



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

● はじめに

ある日とつぜん、黒<sup>くろ</sup>いかたまりが  
空からふってきた。

マキオは、「ギャーッ！」と悲鳴<sup>ひめい</sup>を  
あげ、しりもちをついてしまった。  
世<sup>よ</sup>にもおかしいな一週間<sup>しゅうかん</sup>は、こ  
うやってはじまったのである。

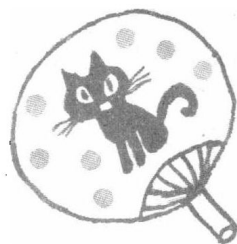


おかしなげつかすいもくきんど月火水木金土／もくじ

|   |        |       |       |     |
|---|--------|-------|-------|-----|
| 1 | 月曜     | 日     | ..... | 8   |
| 2 | 火曜     | 日     | ..... | 31  |
| 3 | 水曜     | 日     | ..... | 53  |
| 4 | 木曜     | 日     | ..... | 71  |
| 5 | 金曜     | 日     | ..... | 93  |
| 6 | 土曜     | 日     | ..... | 117 |
|   | おまけの日曜 | 日     | ..... | 140 |
|   | あとがき   | ..... |       | 150 |







作者・**肥田 美代子**(ひだ みよこ)

大阪に生まれる。大阪薬科大学を卒業。現在、日本児童文学者協会会員、「亜空間」同人。著書『先生しごいたる』『先生はおちこぼれ』『ミスかあちゃんがんばる』『オヤブンはプールがおきらい』絵本『すすめアルフ』『学校うります』など。住所／大阪市生野区勝山北 2-4-8

画家・**水沢 研**(みずさわ けん)

1924年、東京に生まれる。太平洋美術学校中退。独得のユーモラスな画風で活躍中。作品に『となりのゴッペ』『おとうさん×先生＝タヌキ』『おしりが4つしっぽが5本』『あばれんまとおひなさま』『ミスかあちゃんがんばる』など多数。住所／東京都新宿区下落合4-14-13

肥田美代子

おかしな  
おかしな  
月火水木金土



1 月 曜 日



「あーあ、やだなあ……」

原田 マキオは、学校の近くまできて、八回めのため息をついた。

きょうは、とびっきりゆううつな日である。だって、マキオのいちばんにが手の体育の、それも授業参観ときている。

算数とか国語ならよかったのになあ、とマキオは思う。

「いいのよ、体育なんかにが手だって。私立中学の入試の科目だけ、しっかり勉強してればだいじょうぶよ。むかしから体育のできる子は、おつむがからっぽだっていうわよ。気にすることないわ。」

マキオのおかあさんの口ぐせだ。

ボールを投げたら、まるつきりへんなところへストン。いくらいっしょうけんめい走っても、いつもびり。自分には運動神経がないのか、あってもつかいものにならないんだと、なかばあきらめてしまったマキオ。

このごろは、昼休みも教室にのこって、塾のテキストとにらめっこしてすごす。だから、四年一組になってからは「青びょうたん」という、ありがたくないあだ名までつけられてしまった。

校門をくぐりながら、マキオはとうとう、十回めのため息をついた。

とつぜん、黒いかたまりが空からふってきた。

「ギャーッ！」

マキオは悲鳴をあげ、ぶざまにもしりもちをついてしまった。ところが、氣をとりのおしてよく見ると、その黒いかたまりは、用務員のおじさんの飼いなこの、小太郎だった。

「ちえっ、なんだよ。ねこのくせに人をびっくりさせるなんて、なまいきだぞ。」

マキオは、てれかくしにブツブツもんくをいいながら、ズボンについたほこりをはらった。

ズボンをよごしてかえると、おかあさんのきげんがわるいからだ。

「マキオちゃん、あばれちゃだめって、いつもいってるでしょう。そんなにエネルギーがあまってるのなら、ぜんぶ勉強にまわしなさい。」

おかあさんは、地球ちきゅうのエネルギーせつやくの節約きようりよくに協力きようりよくしているつもりなのかもしれない。

マキオが、ランドセルについた土をはらっていると、

「ふん、こんじょうなしめが。」

という声がした。

マキオはびっくりして、あたりをきよろきよろ見まわした。だが、近くちかにいるのは、毛けなみのうすよごれた黒ねくろこの小太郎こたろうだけだ。

マキオは首くびをかしげた。

「なんでえ、青あおっちょろい顔かおしやがって、しりもちなんかついてよ。みっともねえったらありやしねえよ。」

「お、おまえ……」

マキオは、息いきがとまりそうになった。だって、ねこの小太郎こたろうがしゃべっていたのだ。それも人間にんげんのことばでだ。

あまりのことに、マキオがぼかんと口をあけていると、

「まったく、それでも男おとこのつもりかよ。なさけねえったらありやしねえ。」

ちよつと長めながのねこ顔がおを、ツンとうわむけて、小太郎こたろうは、はきすてるように、またいった。

これには、さすがのマキオも頭あたまにきた。ねこのくせに、人間にんげんさまをばかにするなんて、ぜったいにゆるせない。

マキオは、小太郎こたろうをにらみつけた。

「おっ、青あおいの、やる気かい。そりゃ、おもしれえや。相手あいてになってもいいん

だぜ。」

ジロリと、小太郎こたろうがにらみかえしてきた。

—— チッキシヨウ、ねこになんか負まけてたまるか。

マキオは歯はぎしりした。ところが、さていざとなると、手がでない。

なにせ、けがをしてはいけないうと、おかあさんから、けんかはきびしくとめられている。

マキオが、手をだしたりひっこめたりしていると、小太郎こたろうがフフンと鼻はなでわらった。

「かわいそうに、けんかもできねえのかよう。」

マキオはなにもかもわすれて、むちゅうで小太郎こたろうにとびかかっていった。

「くそオ、こいつめ。」

「おっとと。骨ほねがささるとあぶねえや。」

小太郎こたろうが、ひょいと身みをかわした。

ゴッソ!



「いたいっ。」

マキオはいやというほど、コンクリートべいにおでこをぶつつけた。さわってみると、みるみるたんこぶがもりあがってきた。

「いてて、いたいよう、おかあさーん。」

マキオは頭あたまをかかえて、なきだしてしまった。

こんなたんこぶを見たら、おかあさんは氣絶きぜつしてしまうだろうな、どうしよう。

なきながら、マキオの頭あたまの中は、おかあさんでいっぱいになっていた。

そのとき、小太郎こたろうがするりとよってきて、へんなねこなで声こえをだした。

「おいおい、だいじょうぶかい？　うーん、こいつは、でっけえたんこぶができちまったな。むりすんなよ。それより、ものは相談そうだんだが、どうだい、おれとおまえと入れかわってみないかね？」

「えっ、な、なんだって？　いま、なんていったの？」

マキオは、なみだでぐっしりぬれた目を、あわてて手でふいた。

「ちよいとおまえさんと入れかわってみるのさ。おまえが小太郎<sup>こたろう</sup>さまで、おれがマキオになる。どうだい、名案<sup>めいあん</sup>だろう？」

小太郎<sup>こたろう</sup>は、自分の名まえにだけ、さまをつけた。

「そ、そんな……。だ、だめだよ。」

マキオは、あわてて首<sup>くび</sup>をふった。そんなことをしたら、おかあさんがなんというか……。

「いいじゃねえか、そんなにかたいこといいなさんな。たまには、生活<sup>せいかつ</sup>に変化<sup>へんか</sup>つてものがなけりや、世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>つまんねえぜ。毎日<sup>まいにち</sup>毎日、ランドセル背<sup>せ</sup>おって学校へきて、たいくつな授業<sup>じゅぎょう</sup>をうけてよ、いったい、どこがおもしろいんだよ。な、おまえもそう思うだろ？」

小太郎<sup>こたろう</sup>はねこらしくない、なまいきなことをいった。

そのとき、マキオはふと、きょうの体育<sup>たいいく</sup>の授業参観<sup>じゅぎょうさんかん</sup>のことを思いだした。

みんなのまえで、大はじかくくらいなら、このなまいきなねこと入れかわったほう